半地下の図書室

後藤怜衣

その本を手に取った時、私はなにも気づかなかった。その本は、古本屋の棚に、他の本と一緒に差し込まれていた。タイトルに惹かれ抜き出した、そのざらりとした感触のカバーには、フラスコやビーカーが描かれていた。最近多いソフトカバーでなくハードカバーの単行本で、持ち重りがする。著者の名に聞き覚えも見覚えもなかった。

その本だけを買い、古本屋を出た。最近、体力が落ち、重いものを持つのにためらいを覚える。せっかく出かけても、本は一冊、二冊持つのがやっとだ。

電車に乗り、最寄り駅で降りた。改札を抜け、駅を出ると、冷たいものが鼻に当たった。見上げれば、一気に雨粒が降ってきた。急いで駅の軒下に戻る。雨はみるみるあたりをけぶらせ、足止めを食った人が軒下に連なっていく。

傘を買いに駅のコンビニに足を向けかけたが、急ぐ用事もない、と思い直した。改札前のベンチに座って、買ったばかりの本を開く。

語り手は大学生の「私」。「私」の所属する研究室は、ある夜、泊まり込みで研究をしていた。その翌朝、教授が廊下で何者かに胸を刺された状態で発見された。その日泊まっていたのは、教授の助手、院生の二人、学部生の六人で、他の研究室で泊まっている者はいなかった。

「私」は、自分が犯人でないことを知っているし、研究室仲間のことも信じていた。だが、この中の誰

かが犯人なのだ。教授と馬が合わなかったMくんだろうか、いや、それとも就職の口利きを頼み、断られたS先輩だろうか。

「私は午前三時過ぎには仮眠を取っていました。それから朝まで一度もソファーから動いていません」

私は顔を上げた。この事件の犯人を、私は知っている。

いや、しかし、なぜ私は知っているのだろう。思い出せそうで思い出せない、うずまくような灰色の頭の中が、気持ち悪かった。

どこかで読んだのだろうか。どこで、いつ、読んだのだろう。

奥付を見れば、ウン十年前に出版されている。ちょうど、私が最初の会社をやめて故郷に帰った前後である。

そうか、と私はひとりごちた。会社の図書室だ。

※

会社は、六．五階建てのビルの三階にある。〇．五階分は半地下部分で、そこには図書室と売店があった。他にも部屋はあるようだったが、私が入れるのはそこまでだった。

図書室の、上部にすりガラスをはめ込んだスチール製の引き戸は、いつも閉まっていて、開室しているかどうかは、ガラス越しの明かりから読み取った。とは言え、察するに、昼の十二時から十四時、その後十六時から十八時まで開けているようだった。土曜日、月曜日は休みだ。日曜日は、会社に行かな

いからわからない。
その部屋が図書室だとわかったのは、そのドアの横の壁に、「図書室」と書かれた藁半紙が貼り付けられているからで、会社の備品を買いに売店に行った時に見かけたのが初めだった。
すべりの悪い戸を引くと、三方の壁に沿って背の高い本棚が備えつけられ、中央には背の低い本棚が四列並んでいる。戸のすぐ右手には受付があり、それですべてだった。
全体的にうす暗い室内で、受付の黒い電気スタンドから発される白い光だけが妙に明るい。受付には高齢の女性が一人、着物を着て、座っていた。
本棚に並ぶのはほとんどが大人向けの小説かエッセイで、単行本、文庫本は問わなかった。隅の方には判型の大きな画集や写真集、古い雑誌も置いてある。
私はてきとうに見つくろった一冊を抜き出して、受付に持って行った。そして、だいだい色のカードに借りる本のタイトルと著者名を、本の裏表紙の裏側の茶封筒に差し込まれたうすだいだい色のカードに自分の名前を書く。
二枚のカードを本と一緒に差し出すと、女性は、事務仕事か、書きものをしていたノートを閉じ、金縁の眼鏡越しにそれらを仔細に見比べた。確認を終えると、女性は眼鏡を外して、本をすっとこちらに押した。女性はなにも言わない。
「ありがとうございます」

と私が言っても、ただ軽く頭を下げるだけだった。

図書室の横にある売店は、文房具や切手、パン、弁当、飲み物が置かれていた。図書室とは打って変わって、白い蛍光灯と壁が明るく、それがかえって落ち着かない。

店主らしい高齢の女性も明るくいい人だったが、時々計算を間違えた。だから、たくさん品物を買った時や会社の経費で落とす文房具を買った時は、彼女が黒光りするそろばんをはじくのに合わせて、心の中で一緒にはじいた。

本当かどうかわからないが、図書室と売店の二人が姉妹で、ビルの大家だといううわさを聞いた。あるいは、義理の姉妹だという話もあったし、さらには、売店の女性の夫と息子がビルの守衛だという話まであった。

二人の背格好は同じくらいに思えたが、図書室の女性は立っているのを見たことがないから、はっきりとはしない。顔は面長と丸顔で、目鼻もそう似ていなかったが、似ていない姉妹の例はいくらでもある。

いずれにせよ、二人の仲はいいらしかった。

売店は朝から夜の六時まで開いている。一度、六時過ぎにペンを買いに行ったら、図書室の引き戸の向こうは暗く、売店はちょうど店じまいをしているところだった。

「あらあ、ごめんなぁ、もう売り上げしめてしもうたんよ。また明日にしてな」

そう言う彼女の向こうに、図書室の人が見えた。パイプ椅子に浅く腰かけ、文庫本を読んでいる。明るい光の中で見るのは初めてで、なんだか不思議に思えた。

ほの暗い階段で地上に戻る私の背に、笑い声が響いた。思わず振り返ったが、廊下には誰もいない。売店の中から、二つの笑い声がたしかに聞こえた。

図書室にはいろんなジャンルの小説があったが、強いて言うなら推理小説が多かった。体系だった図書館、図書室と言うより、受付の女性が個人的に買い求め、読んだものを並べているようであった。

本を借りるのは週一回で、火曜日の夕方に、自然になった。週末に近付くと残業する羽目になるが、火曜日であれば融通が利くし、平日忙しくても土曜の午後と日曜日に読みきることができる。

訪れる時、他の人を見かけたことはなく、好きなだけ本を抜き出しては戻した。

受付の女性は、ペンを走らせるかすかな音の他は、ほとんど音を立てなかった。だから、立ったままページをめくっていると、室内には自分しかいないような錯覚を覚えた。

本を借りた後は、売店に寄って紙パックのいちごオレを一本買った。上司に怒られても怒られなくても、働くことは心身をすり減らす。

冬はそのままっすぐアパートに帰って、ご飯を食べ、銭湯に行って、半纏を着て、こたつで本をめくり、いちごオレを飲んだ。

春から秋は、少し遠回りをして公園のベンチでいちごオレのストローを噛みながら、夢中になってページをめくった。章の切れ目にふと顔を上げれば、月が昇り、闇が落ちている。慌てて荷物をまとめ、駅に急ぐ。

頭が痛かった。熱はない。だから、仕事に行かないといけない。立ち上がると、めまいがして、とっさに壁に手をついた。壁に吊ったカレンダーは、働き出して三度目の四月のページをこちらに向けている。

たった二年。それなのに、こんなに苦しいのは、私が弱いからだろうか。

本を借りる火曜日が唯一頭痛なしに会社に行ける日で、火曜日の夜、公園のベンチに座るたび、このまま時が止まればいいのに、永遠に水曜日が来なければいいのに、と思った。

六月の朝、いつも通りホームで電車を待っていて、自分が吸い寄せられるように線路を見つめているのに気がついて、ぞっとした。それでやっと、会社を辞める決心がついた。自分が弱いかどうかはどちらでもいい。私が私としてすこやかにいるために、できるかぎり早く去らなければならない。

ただ、胸を小さな爪でもって引っかくものがあった。会社を辞めたら、図書室に行けなくなる。

会社に辞意を伝えて、一ヶ月が経った。

「私、明日で会社辞めるんです」

最後の本を返しながら言った。返事を求める気はなかった。つと彼女が目を上げて、目が合った。
「どうして？」
びっくりして、私は言葉に詰まった。
「なにかあったの？」
彼女はかわいらしい声をしていた。
「え、いえ……毎日、疲れてしまって」
「お仕事？」
「はい」
答えてから、この女性と会社の社長は顔見知りかもしれない、だとしたらまずいな、と一瞬思った。しかし、どうせ明日で辞めるのだ、なにを今更気にすることがあるだろう、と冷静になった。
「わかります」
彼女はゆっくり頷いた。
「わたくしもそうでしたから。今は働かなくてすんで、本当にありがたい。ここは趣味だし」
あけすけな物言いに、つい、私も生意気な口をきいてしまった。
「家賃収入でですか？」
あら、と彼女は目を丸くした。

「ご存じでしたか」
「うわさですけど……」
「うわさ」
「はい……売店の女性と姉妹で、このビルの大家だと」
「あらら。あたらずと言えども遠からず、ですねえ。初枝(はつえ)さん、売店の店主ね、初枝さんは、私の弟の妻です。弟がこのビルの大家で、まあ、父の遺したビルですから、家賃収入は私ももらっていますが」
「あ……そういう関係なんですね」
「ええ。それで、お仕事を辞められて、今後はどうなさるの？」
「いったん実家に帰ります。仕事のことはなにも決まってませんけど」
「そう。でも、たまにはそういう時間も必要ですよ。私も勤めたり辞めたりの繰り返しでしたし。なにかしたいことはあるんですか？」
「……学生時代は絵を描いていたんですけど」
顔が勝手に苦笑いを浮かべた。
「なかなかうまくいかなくて」
「……そうねえ。努力しても、かなわないことはありますねえ」
女性は一瞬遠くを見る目をし、それから思い出したように腕時計に目を落とした。私もつられて確認

した。六時まで、後三十分ある。
「時間はありますか？　もしよかったら、私の夢の残骸でも、聞いてくださいな」
「夢の残骸」
　私が繰り返すと、女性ははずかしげな顔になって、受付から出て来て、パイプ椅子を私の前に置いた。背が高かった。
「ここに座って」
「ありがとうございます」
「実はね、小説を書く人になりたい、とずっと思っていたんです。いくつか懸賞小説に出したこともありますが、どれも箸にも棒にもかからなくて。それでも、どうしてもあきらめきれなくてねぇ。この受付に座って、ずっと書いていたんですよ」
　するすると語る女性は、いつもと別人に見えた。
「先日、やっとまた一つ小説を書き上げまして。これから清書をしないといけませんけど。短編の推理小説なんです。誰かに読んでもらって、感想が聞きたくて。賞を獲らなければ、ただの習作、世に出ることもないので……。だけど、身近な人に見せるのははずかしいものでねえ。本当は、きちんと清書したものをお渡しできればいいんですけど、あいにく時間もないし、かえってそれも迷惑でしょうし……」
　女性は背筋を伸ばし、ノートを取り出して、朗読しはじめた。

「私は化学を専攻する学生で、その夏の日、研究室に泊まり込んでいた。教授の他には、助手と院生二人、学部生が六人いた。その夜泊まり込みで研究をしていたのは私たちの研究室だけで、大学内には守衛と私たちの他には、人っ子一人いなかった」

※

地の文と台詞、すべてが彼女の声で再生される。文字の記憶でなく、耳の記憶だった。

私は途中のページに指を挟んだまま、表紙裏を開いた。著者、平山まつ。顔写真はない。一九一〇年、S県出身。一九八〇年、「冷たい夏の記憶」にてM新人賞受賞、同作を含む本短編集『冷たい夏の記憶』でデビュー。

スマホで出てきた写真は、たしかにあの図書室の女性に違いなかった。しかし、彼女はデビューして五年、胃がんで逝去し、出版した本はこの一冊だけらしい。

ぼんやりと駅の外を見やると、雨はやんでいた。石畳にできた水たまりが、傾きかけた陽にひかっている。

本をしまって、杖を頼りによっこらしょ、と立ち上がる。駅を出たところで、引き寄せられたように足が止まった。自動販売機がこちらを見ている。いちごオレが一番上の列の端にあった。

私は杖で踏ん張って、背伸びをし、ボタンを押した。

しゃがんで取り出すと、立ち上がるのに時間がかかった。

パッケージのいちごは変わっているような、変わっていないような。値段は確実に上がっている。

自動販売機のとなりの壁にもたれて、一口吸い込む。想像以上の甘さに、思わず唇を離した。だが、実際には甘さは変わっていないかもしれない。

まなこを閉じれば、ほの暗い図書室とまばゆい売店が浮かぶ。あのビルはとっくに取り壊されているだろう。

それでも、あの女性、いや平山さんは、夢をかなえた。この本には、後二つ、私が聞いていない平山さんの小説がおさまっている。家に帰って、いちごオレと一緒にゆっくり味わおう。その前に。

「おめでとうございます」

彼女は、今年でデビュー六〇周年を迎える。

了

半地下の図書室

2023 年 10 月 28 日　発行

著者　後藤怜衣

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子
発行　函南町教育委員会
製本　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるもの
とします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は
著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

古本屋で買った本を読み始めた私は、その結末を知っていると気づく。それをきっかけにかつて勤めていた会社の半地下に図書室があったことを思い出す――図書室とその主の、一冊の本にまつわる物語。